

ハンセン病について考える

想像してみてください。明日から愛する家族と離れ離れになってしまうことを。結婚しても子どもを生むことを許されなくなることを。限られた敷地内に閉じ込められ、外には出られなくなることを。そして、そんな生活が一生続いていくであろうことを。

ハンセン病回復者(以下、回復者)の人たちは、長きにわたり、国による感染防止という名目の隔離政策で、このような人を人とも思わない扱いを受けてきました。ハンセン病の歴史は、差別の歴史なのです。

私がハンセン病について初めて関心を持ったのは、平成15年に熊本県のあるホテルが、回復者の宿泊を拒否した事件でした。当時の私は、漠然と回復者の人たちに同情するだけで、こんな人たちがいたんだなあという程度の認識しかありませんでした。そして、新聞やテレビで報道される内容を、それ以上深く知ろうとはしませんでした。しかし数年前に、私は東京都東村山市にある国立ハンセン病資料館を訪れる機会を得ました。そこでは、ハンセン病の歴史や療養所での生活の様子などを詳しく知ることができ、ハンセン病に対する正しい知識や認識を深める良い機会になりました。

ハンセン病は、体の一部が変形したりする外観の特徴から、偏見や差別の対象にされることがありました。さらに、明治後期から昭和初期にかけて、国策として法の下に行われたハンセン病患者の強制隔離政策により、人々の中に「ハンセン病は恐ろしい」という偏見や差別意識を植え付けてしまいました。

現在では、国は隔離政策の過ちを認め、療養所の入所者や社会復帰者に対して謝罪し、名誉回復や支援に取り組んでいます。しかし、前述したホテルの宿泊拒否のように、現在もハンセン病に対する偏見や差別がなくなったわけではありません。

ある療養所の入所者が「生まれ育った故郷を忘れたことはない。しかし、自分の家族に迷惑を掛けるので故郷に帰ることはできない」と話していました。故郷



や実家に戻って生活している回復者の人たちもいますが、その数はごくわずかだそうです。この人のように、さまざまな理由から、今でも療養所で暮らす人たちが多くいるのです。回復者の人たちやその家族が辛くて悲しい思いをしたのは、本人や家族に問題があったからではありません。全ては病気に対する無知や理解不足、そして偏見や差別が原因だったのです。

回復者の人たちの高齢化が進み、あと数十年もすれば、偏見や差別に苦しめられてきた回復者の人たちは、この世を去ります。しかし、それでこの問題が解決するわけではありません。

私たちは、ハンセン病についての正しい知識と理解を深めることで、回復者の人たちや家族に対する偏見と差別を解消していかなければならないと考えます。そして、過去の過ちを直視することで、この問題を人権問題として認識し、二度と同じような過ちを繰り返さないよう、私たち一人一人が考えていきたいと思えます。

ハンセン病…「らい菌」に感染することで起こる病気で、末梢神経が侵され、知覚障害や発汗障害が起きたり、筋肉の萎縮により体の一部が変形したりする後遺症が残ることがあった。感染力が弱く、感染しても発病することはまれであり、現代では化学療法を中心とした外来治療を行うことで確実に治癒する病気となっている。しかし、過去には国策として患者の強制隔離が行われ、多くの患者が故郷や家族のもとを追われて療養所に強制的に入所させられた。